

曇鸞教學覺書

幡 谷 明

淨土論は、総説分としての偈頌と、解義分としての長行との二重でもって成立っている。

前者は専ら所帰の世界である淨土の内景を讃嘆し、大涅槃の境界に願生する一心帰命の願心を表白せられたものであり、後者はその願生淨土の道においてのみ、自利々他円満を根本の課題とする大乘菩薩道も、真に究竟化せられてゆくことを、五念門を中心とする行道の展開において、釈明せられたものである。

故に曇鸞は論註の劈頭において、竜樹菩薩によって開示せられた難易二道論を掲げ、他力易行道こそは五濁無仏の世にあっても、一切群生海の救済を約束する唯一の仏道であることを開頭せられ、竜樹の意趣を継承し更に

それを純粹に表頭せられた淨土論こそ、大乘仏教の極致を開闡せられたものであると讃仰せられたのである。すなわち、曇鸞はそこで、大乘仏教思想史上における淨土論の位置及びその意義について、「此無量寿経優婆提舍盖上衍之極致不退之風航者也」と、簡潔な表現でもって表わし示されている。そこには、五濁無仏の世に生れ、もはや此土においては仏道の成就し難いことを知らされるより他はないと云う、自力の行による救済への絶望を通して、しかもそこに自己自身を見失うことなく、そのあるが儘を受取り、願生淨土の唯一道を歩む世界が、既に竜樹―天親により他力易行道の開闡の歴史として明らかにせられて来ていると云う、歴史的事実に遇うことの出来た、曇鸞の深い慶びが語られているのである。

曇鸞にとって、その歴史的伝統を見出し得たのは、『統

高僧伝』に記するところによれば、江南に道士陶弘景を

尋ねての帰途、洛陽において、はからずも菩提流支三蔵と値遇することによってであった。それ以前既に曇鸞は、竜樹―提婆―羅什―僧肇による四論の教学を研鑽し、般若中観について熟知せられていたと云われているが、そこには尚学解仏教にとどまり、それを超えて真に仏道に立脚することを不可能にする何物かがあったと思われる。但、曇鸞が義学研究を中心とする江南の学派に属せず、修道の実践を課題とする江北の学派に属し、真理の解明を主題とする三論に依らず、真理の身証を追求する四論に学んでいたことは、注意すべきことであろう。何れにしても曇鸞自身にとって、三蔵流支に値遇し、浄土教の上に真の無量寿を見出し得たこと、そこに「梵焼仙經帰楽邦」と示される決定的廻心を恵まれたことだけは、動かすことの出来ない事実であった。故に曇鸞にとって浄土論を注釈することは、そのまま自督の安心を表白することの他にはあり得なかったのである。

曇鸞は既にして四論の学匠であった。故に浄土論を註釈せられるに当って、そこに勝義と世俗との二諦の相応關係を説く四論の教学が依用されているとしても、別に不自然なことではない。恐らく曇鸞はそれによって、浄

土教の仏教としての普遍的意義を開詮しようとされたのであり、四論の教学が究竟せられる境地の何であるかを解明しようとされたのであろう。

それと共に論註の基底をなしているものは讚阿弥陀仏偈に、「我從二無始二循三界、為二虚妄輪二所二廻轉、一念一時所二造業 足繫二六道二滯三塗」 唯願慈光護念我令我不失菩提心 我讚二仏恵功德音 願聞二十方諸有緣 欲得二往生安樂三者 普皆如二意無二障礙」と表白されている如き、自己の業障についての厳しい懺悔と、そこに動いて止まない仏徳の讃嘆による衆生利益への悲願である。

すなわち浄土論註は、自らを五濁無仏の世における下品下生の凡夫として受取り、自己の根源に無始時來の流転輪廻の現実相を見開いてゆかねばならなかった曇鸞自身の深刻な時機の内省と、仏教の普遍的真理であることを二諦と縁起との相即において開示した般若中観の教学との立場から、大無量寿經の眞実教たる所以を開顯せられたものに他ならない。実に曇鸞の論註によって、大無量寿經こそは仏道の根幹をなすものであり、仏教の歴史とは、大無量寿經に教說せられた本願の名号がそれ自らを具現してゆくところの歴史に他ならないことが表わし

示されたのである。論註の劈頭に置かれた「謹案」の語は、曇鸞によって仏道史観が開頭せられた、その根本的態度を表わすものとして、深く注意すべきことである。

周知の如く、この「謹案」の語に最も深く注意を寄せられたのは、宗祖親鸞聖人であり、浄土真宗を開頭せられた教行信証全六巻は、この「謹案」の態度において著わされたものであることは、教行信証の各巻に次の如く「謹按」の語が置かれていることによっても明らかである。

(教 巻) 「謹按。浄土真宗。有二種廻向。一者往相。二者還相。」

(行 巻) 「謹按。往相廻向。有大行。有大信。大行者稱。無碍光如来名。」

(信 巻) 「謹按。往相廻向。有大信。大信心者。則是長生不死之神方。」

(証 巻) 「謹按。真実証。者則是利他円満之妙位。無上涅槃之極果也。」

(真仏土巻) 「謹按。真仏土。者仏者則是不可思議光如来。」

(化身土巻) 「謹按。化身土。者仏者如。無量寿仏觀經說。」

しかも、化身土巻の内容を除いて他の前五巻は、凡べて曇鸞の論註によって解説せられた、大経の真実義を謹

按せられたものであることは、今更説明するまでもないことである。そこにも吾々は、教行信証が曇鸞教学に立脚して著わされたものであることを、汲み取ることが出来るのである。

尚それと関連して想起させられるのは、教行信証における総序・別序・後序の三序が、次の如く善導の玄義分(序題門釈)に示された「竊以」の語でもって、表わされていることであらう。

(総序) 「竊以難思弘誓度難度海大船。」

(別序) 「夫以獲得信樂。發起如来選択願心。」

(後序) 「竊以聖道諸教行証久廢。浄土真宗聖道今盛。」

これを先の「謹按」の態度と照応するならば、古来論說せられて来た、宗祖教学における曇鸞教学と善導教学の位置、乃至は教相と安心、真実の仏教と真実の宗教との二重音の性格を窺い知ることが出来るのでなからうか。すなわち、教行信証の基底をなしているものは、三序の上に伺われる善導―法然を通して見開かれて来た自督の安心であり、教行信証の表面に説き示されているものは、天親―曇鸞によって開頭せられた普遍の真理であって、その両者が相応して領受開詮せられたものが、教行信証に他ならないのである。

既に先学によって明らかにせられて来た如く、教行信証は、人類の悲しき流転の歴史の根源に、大無量寿経の精神が、それ自らを顕現せしめて来た仏道の歴史を発見することによって著わされた、宗祖の仏道史観開顯の書であった。

その宗祖の仏道史観は、「謹按」の態度において開かれたものであり、宗祖をして「謹按」せしめたものが、化身土巻に示された、末法濁世における自身の業障の痛みと、師教との値遇による回心の慶びであったことは、明らかである。

吾々がここで翻って、論註の劈頭に掲げられた「謹按」の語を想うならば、その宗祖の立場こそ曇鸞自らの立場でもあったことを知ることが出来るであろう。

今はその仏道史観開顯の書とも云うべき論註によって、吾々が真に依り所とすべきものが何であるかを、上巻に釈顯せられた三依釈と三在釈の上に、窺ってゆきたいと思う。

二

山口先生の御教示に依ると、印度における仏教論部の中、偈頌体のものの一般的性格としては、そこに釈論が

設けられていたとしても、偈頌の方が本分と言うべき意味をもっているとのことである。

浄土論も亦、願生偈が本分をなすものであることは、「無量寿経優波提舍願生偈」と示された題号から見ても、明らかである。

その願生偈は、「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来」願生安樂国」と云う、天親菩薩の全我を挙げての釈迦弥陀二尊への帰敬を表白せられた偈頌に始まり、「我作論説偈 願見弥陀仏」普共諸衆生」往生安樂国」と云う、十方有縁の衆生に対し浄土往生を願われた偈頌でもって結ばれている。しかし「普共諸衆生」とは「世尊我一心」と表白せられた自身において見出され、願われているものである限り、「世尊我一心」を離れてあるものではない。そして三敝二十九種莊嚴をもつて讃嘆せられた如来及び浄土も、「(帰命)尽十方無碍光如来」と(願生)安樂国」の内景を開示せられたものに他ならないから、現実における端的唯一の道は「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来」願生安樂国」と云う、建章の一句に摂し尽されるのである。

曾つて曾我先生は、この一句について「伝承と已証」の中で、「これは天親菩薩における二河白道の実践の表

白である」と説かれ、「天親菩薩の教学である瑜伽唯識は、この我の一字の脚註である」と示されている。洵に瑜伽唯識とは、無始時來染汚意によって自我に執著し、我癡・我見・我慢・我愛なる煩惱を中核とする妄念妄想の世界を造り出してゆく身が、如何にして妄念妄想の他に我が身は存在しないと信知し、妄念妄想の根源にあつて妄念妄想を転じ浄化するところの本願の大地に安住するかを問ひ、それを無始時來浄法界より等流し來つた教法の聞薰習による内觀によって見開けるものであつた。

そしてその根源的欲求に応じて見出されたものが、「於大衆之中説無量壽仏莊嚴功德、即以仏名号」為經体」と曇鸞によつて註釈せられた、浄土の三部經殊に大無量壽經であつたのである。すなわち浄土論は、大經を教説せられた釈尊によつて發遣せられ、名号になつて招喚し給う如來に遇ふことにより、始めて妄念妄想の只中に身を置きつつ、而も自己自らを見失ふことなく、念仏して大涅槃の境地たる浄土に願生し、生涯不退轉の身と転成せしめられる道に立たされるに至つたことを、表白せられたものに他ならない。

曇鸞はそれを、「我依修多羅 真實功德相」説願偈總持「興二仏教 相應」と示された、造論の意趣を表わす偈

頌について深く注意せられ、それを、但「成優婆提舍名」と見るのみでなく、そこに「成上起下偈」の意味を見出して、そこに何所依・何故依・云何依の三依釈を施し、その意味を余す所なく開顯せられている。

今それを仮りに図式化すれば、次の如くなるであろう。

何所依——修多羅——浄土三經（別依大經）

何故依——如來——真實功德相（三種莊嚴——本願の名号）

云何依——如來修行相應——五念門の実踐（真實の行信）

曇鸞がこの三依釈において、特に意を注いで開顯せるものは、大無量壽經の真實教であることの意味であり、従つてその主題が何故依の釈に置かれていることは言うまでもない。

すなわち曇鸞はそこに、「真實功德相者有三種功德」と示して、不実功德を先ず明かし、次に真實功德を顯顯せられている。これは、論註を一貫して流れる曇鸞の根本的立場を表わすものであるが、そこに吾々は、「何故依」と云う問題を、但單に教法を対象としてその眞理性を解明すると云うのではなくて、何処までも教法の眞實性を自己の現存在の内面的方向において問ひ尋ね、領受してゆこうとせられた曇鸞の道念の酷しさを見出すであ

ろう。不実功德とは、「凡夫人天諸善、人天果報、若因若果皆是顛倒皆是虚偽」なる、三界内存在としての衆生の現実相であり、凡夫人天の善が皆是顛倒虚偽と絶対否定的に表わされねばならないのは、それが「從有漏心生不順法性」るが為である。吾々は日常の世界において、自己の生活が真実の生活であるとは、如何にしても断言し得ない。併し亦、全く真実がないと、それを全的に否定し懺悔する程、深く自らを内省することもあり得ない。恐らく自意識の世界にあつては、自己の生活を真実として是認することも出来ず、全く否定し去ることも出来ずして、善惡にかかり果ててゆくより他はないであろう。しかし今如来の大悲によって見出された衆生の現実相は「皆是顛倒虚偽」の他の何物でもないのである。その如来によって智見せられてあつた機の内省を通して、そこに見開かれて来るものが、「從菩薩智慧清淨業起莊嚴仏事。依法性入清淨相。是法不顛倒不虛偽」と云う、如来の真実功德である。ここに「從菩薩智慧清淨業起莊嚴仏事」と示されてあることは、更に真実功德の具體的相を三嚴二十九種莊嚴でもって開示せられた中でも、総相と言われている清淨功德釈において、「見三界是虚偽相是輪轉相は無窮相、如蜚螻循

環、如蚕繭自縛、哀哉衆生締此三界顛倒不淨、欲置之衆生於不虛偽、於不輪轉、於不無窮、得畢竟安樂大清淨」と註釈せられている如く、清淨真実なる淨土を建立し、そこに凡べての衆生を摂取し尽そうとせられる、法藏菩薩の大願業力を表わされたものに他ならない。洵に法藏菩薩によって發起せられた大悲の本願は、大願業力として妄念妄想の他なき衆生の上に顕現し、如何に衆生が無始時來の我執によって固く自ら閉鎖の世界に繫縛停滯して居ようと、それを淨化し解放して貪瞋煩惱の只中に清淨願往生心を發起せしめ、淨土に摂取して如来の眷屬たらしめることにより、淨土を莊嚴せられてゆくのである。曇鸞は、かかる淨土莊嚴の意義について「依法性入清淨相」と註釈せられているが、それは性功德釈に「此淨土隨順法性不乖法本」と註釈せられている如く、願力自然として顕現せる淨土の全体が、無為自然なる法性真如の顯現に他ならないことを、表頭せられたものである。從來この「清淨相」について、それを真如法性の意味に解釈し、淨土は真如法性に摂まると言う意味に領解せられて來たようであるが、この場合の「清淨相」とは寧ろ、如来の清淨業によって建立せられた淨土の意味に解釈すべきであり、真如法性の顯現が

浄土であると言うことを表わされたものと領解すべきでなからうかと思う。

そして曇鸞が、更にその内面的意味を開示して、「云何不顛倒依_レ法性_ニ順_ニ諦_ニ故、云何不_レ虚偽_ニ攝_ニ衆生_ニ入_ニ畢竟_ニ淨_ニ故」と註釈せられているのは、如来の顕現と衆生の帰入とが一如である世界こそ、真実功德相としての浄土であることを表顯されたものに他ならない。すなわち衆生が浄土に帰入せしめられることは、ひとえに如来の本願力廻向によるものであり、衆生は、その本願力に乗托することによって、限りなく彼岸の浄土を背景として生死の世界に還来せしめられるのである。そのことは、上巻の清淨功德積において、「安樂是菩薩慈悲正觀之由生、如来神力本願之所建、胎卵湿生緣_ニ茲_ニ高揖、業繫長維從此永斷、統括之權不_レ待_レ勸而鸞_ニ、勞謙善護齊_ニ普賢_ニ而同_ニ德_ニ」と示されていることによっても、明らかである。実に浄土は、一切大小善悪凡愚を選ぶことなくその全てを内に攝め取り、そこに「横超斷四流」の直道を開示せられるのであり、「統括之權、不_レ待_レ勸」と示された如く、自然の徳として還相廻向の身を成就せられるのである。そして、かかる往還_ニ廻向の徳が即時的に成就せられ、身証せられる立場を表わしたものが、「有_ニ凡

夫人煩惱成就_ニ亦得_ニ生_ニ彼淨土_ニ、三界繫業畢竟不_レ牽、則是不_レ斷_ニ煩惱_ニ得_ニ涅槃分_ニ」と説き示されている不断煩惱得涅槃の立場に他ならないのである。

かくの如く、煩惱を具足せる凡夫の上にも、既に生死の彼岸に、帰えるべき世界として浄土が見開かれた以上、最早業繫の長き維によって縛られることもなく、如来の不虛作住持功德にはからわれて、生死の世界に随順しつつ涅槃への道を生きる身とならしめられるのである。それは、ただ如来の挙体的顕現である念仏によるの他はない故に、宗祖は尊号真像銘文において、「真実功德相とは誓願の尊号なり」と積されたのである。大無量壽經が真実教を開顯せる經典として、吾々にとつての唯一の所依とされるのも、浄土を帰依処として念仏しつつ生死界を尽す道がそこに開示せられているからに他ならない。故に天親は、その浄土の往還の道を、礼拝・讃嘆・作願・觀察・廻向の五念門によって表わされたのであり、曇鸞はそれによって、五念門が如実に実践せられてゆく信の一念において、衆生は穢土の仮名人であるままに浄土の仮名人たらしめられることを明らかにせられたのである。それは、如来の本願に照して言えば、十方衆生のままだが国中人天であるところの存在とならしめられると

云うことである。けだし念仏の門を通さずして浄土を考えるならば、それは妄念妄想所産の観念界に過ぎないであろう。そして妄念妄想の領域である限り、それは生死の苦しみからの一時的逃避の場所とはなり得ても、生死から解放し、生死に随順せしめる所の畢竟の帰依所とは、如何にしてもなり得ないのである。故に曇鸞は、「若先方便觀法性時則証實際」(下巻)とも、「若人不發无上菩提心但聞彼国土受樂先聞、為樂故願生亦当不得生也」(下巻)とも表わして、かかる立場を絶對的に否定し尽してゆかれたのである。

二

かくの如く曇鸞は、三依釈によって、「世尊我一心」なる帰命願生の信が成立する根拠を明らかにせられ、大無量寿經の真実教たる所以を開示せられたのであるが、それに対して密接な關係をもつのは、論註上巻の終りに「普共諸衆生」往生安樂國」と云う廻向門につき、八番問答をもって料簡せられた箇所に示されている、三在釈の内容であろう。

曇鸞は八番問答の最初に、大經の第十七・十八二願成就文及び觀經の下々品の文を引用して、論に示された、

「普共諸衆生」とは、成就文に説かれた「諸有衆生」の他にはなく、それは一生造惡の下々品の凡夫の他にはないことを明がされている。そこに曇鸞が本願成就文を、觀經下々品の經説によって領受せられていることは、深く注意すべきことであろう。後に善導が第十八願を領解して、「若我成仏十方衆生称我名号下至十声若不生者不取正覚」と表わされたのは、この八番問答における曇鸞の領解の立場を承けて、それを強く表面に打出してゆかれたものであると言って、よいのでなからうか。

既に少し触れた如く、曇鸞の根本的立場は、下々品の衆生として自らを見出し、それが如来の本願廻向の表現である名号によって、浄土に往生し、無生の生として頭わされるが如き、真実究竟の証果を得るに至る他力易行の道を、開顯せんとせられるものであった。しかしそれは、宗祖が難思議往生と表わされた如く、容易に相對的分別を離れ去ることの出来ない者にとっては、到底納得し得られることではない。故に曇鸞は、無始時來三界に繫属せしめて來た五逆十惡の重罪も、唯十念々仏によって救済せられてゆくことを臨終と云う人間における局限状況の上に、解明してゆかれたのであり、そこに設けられたものが三在釈に他ならないのである。

すなわち疊贅は、「汝謂五逆十惡繫業等為重、以三下
々品人十念、為輕、應為罪所牽先墮地獄繫在三界
者、今當以義校量輕重之義。在心在縁在決定、
不在時節久近多少也」と徴起し、衆生の罪業と如来
の大願業力である念仏とを對待して、救済の成立根拠を
明らかにせられている。今、それを図式化して示すと、
次の如くなる。

在心——自依——止虚妄顛倒見——生——依——善知識方便安慰聞——
実相法——生——

在縁——依——煩惱虚妄果報衆生——生——依——止無上信心——依——
真実清淨無量功德名号——生——

在決定——依——有後心有間心——生——依——止無後心無間心——生——

この三在積において、特に注意せられるのは、疊贅が
念仏を信の一念において開かれていることである。すな
わち、念仏について、在心積に明かされたものは、就人
立信を表わすものであり、先の三在積に「何所依」とし
て示された修多羅を、よき人の仰せとして示されたもの
に他ならない。それに対して次の在縁積は、その教えが

如来の真実功德相である本願の名号の他にはないことを
示されたものであるから、先の三依積における「何故依」
の意味を表わされたものであることは、言うまでもない
ことであり、それは就行立信を明かされたものと云って
よいのである。洵に念仏のみが如何なる罪業をも包んで
それを超えしめる唯一の法であることを、吾々はよき人
の仰せの上に、聞いてゆくより他はないのであり、その
念仏を選択せられた如来の願心を信知して行くことの他
に、真に決定の場に立つ道はあり得ないのである。故に
その信の一念について明かされた在決定積は、先の三依
積に「云何依」として示された五念門の実践における如
実修行相應の根拠が、如来他力廻向の信の一念にあるこ
とと、相應するものと見ることが出来るのでなからう
か。但そのように、三依積と三在積とを対応せしめて理
解することには、無理があるとも思われるが、三依積と
三在積において表わされていることに、共通した点のあ
ることも、否定し得ないように思う。